

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520168

研究課題名(和文) 東洋蓄音器(オリエントレコード)の社史調査とディスコグラフィの作成

研究課題名(英文) A investigation into the history of Oriental Phonograph Company (Orient Records), and creation of a discography

研究代表者

大西 秀紀 (Onishi, Hidenori)

京都市立芸術大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：60469111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：当該研究より得られた成果は次の3点である。

1. 京都にあった東洋蓄音器(オリエントレコード)の歴史を調査し社史を編纂した。2. 東洋蓄音器で制作されたオリエントレコードのディスコグラフィを作成した。3. 蛍光X線分析法(X-ray fluorescence analysis, XRF)によりSPレコードの成分を分析し、製造の技術的系譜をたどることを試みた。

研究成果の概要(英文)：Three main result were obtained from this reserch project. Firstly, the researcher produced a history of the Oriental Phonograph Company(Orient Records). Secondly, he compiled a full discography of the records produced by the Company. Thirdly, conducting an X-ray fluorescence analysis (XRF) of the material of the 78rpm records, he traced the process of their technical production.

研究分野：近代芸能史

キーワード：大衆芸能 SPレコード 78rpm 蓄音器 蓄音機 オリエントレコード 東洋蓄音器 京都

## 1. 研究開始当初の背景

近年研究領域のさまざまな分野で、音声資料への関心が高まっている。しかし我が国で発売された SP レコードの全貌は明らかになっていない。同時にレコード史研究についても目新しい進展は見られない。音声資料を諸研究に供するには、明らかに基礎資料が不足しているのが現状である。

日本のレコード会社の歴史を書き残した例は、コロムビア、ピクチャー、テイテックといった、現在も続いている会社のものでほとんど、大正から昭和の戦前期に解散してしまった会社の正確な歴史をまとめたものはほとんど見られない。

## 2. 研究の目的

音声資料に関する基礎資料として最も重要なものは、いつどこでどのようなレコードが制作・発売されたかという情報である。当該研究の目的は、大正期に京都で活動したレコード会社・東洋蓄音器に関する次の3点である。

(1) 明治期の東洋蓄音器商会に始まり、東洋蓄音器株式会社を経て、東洋蓄音器合資会社が大正9年に日本蓄音器商会と合併・傘下となるまでの社史を編纂する。

(2) 東洋蓄音器のレーベルであるオリエントレコードの正規盤（自社制作盤）と複写盤（他社のコピー商品）のディスコグラフィ（音盤目録）を作成する。

(3) オリエントレコードを含む、明治・大正期に製造された SP レコードの成分を分析し、その結果からレコード製造技術の系譜をたどる。

## 3. 研究の方法

### (1) 社史

社史編纂のためにはまず東洋蓄音器に関する情報を収集しなければならない。対象は主に明治39年から大正15年にかけて発行された次の資料である。

- 「日出（京都日出）新聞」
- 「大阪朝日新聞（京都附録を含む）」
- 「大阪毎日新聞（京都附録を含む）」
- 「蓄音器世界」（月刊誌）
- 「音楽と蓄音機」（月刊誌）
- 「蓄音機と音楽」（月刊誌）
- 「蓄音機時報」（月刊誌）

山口亀之助「レコード文化発達史」

倉田喜弘「日本レコード文化史」

その他レコード関連の出版物

オリエントレコードの実物

これらから得た情報を元に社史を編纂する。

### (2) ディスコグラフィ

オリエントレコードの第1回新譜発売の大正2年2月から、日本蓄音器商会（以下・日蓄）に吸収合併される直前の大正8年12月までに発売されたレコードに関するものとする。データの基礎となるのは東洋蓄音器発行の総目録、月報、新聞・雑誌広告、オリエントレコードの実物等である。

これらの情報を Excel に入力し表にまとめた上で、発売時期の情報も可能な限り付け加える。

以上は東洋蓄音器が自社制作した正規盤についてだが、同社は複写盤も製造販売していた。こちらの発売年月等は不詳だが、総目録が存在するので、その内容をデータ化し公表する。

### (3) レコードの成分分析

研究の計画段階で、成分分析の手法に関して地方独立行政法人京都市産業技術研究所に相談したところ、蛍光 X 線分析法をご提案いただいた。試しにメーカーの異なるレコード2枚からそれぞれ試験片を作り個人的に分析を依頼したところ、はっきりと違いを確認できる分析結果を得た。

この方法は試験片を作るためにレコード盤を潰さなければならないのが難点で、一般の所蔵機関では実現不可能である。その点は報告者の所蔵盤を使用すれば問題なく、試料の前処理も不要でかつ確実に分析結果が得られるため、この方法を採用した次第である。

当該研究ではオリエントレコードを含む36レーベル計100枚のSPレコードに関する成分分析を行った。得られたデータは Excel に入力の上試料ごとにグラフ化し、比較検討を行う。

## 4. 研究成果

### (1) 社史

東洋蓄音器（以下・東洋蓄）の歴史は、わずか12年であるにもかかわらず非常に分かりにくい。一般的には「大正元年設立の正規盤を製造していた東洋蓄音器株式会社（以下・株）が、大正3年設立で複写盤製造に重きを置いていた東洋蓄音器合資会社（以下・合）に買収された」といった書き方がなされるが、なぜ同じ東洋蓄を名乗りながら株式会社と合資会社が存在するのか。複写盤製造の（合）が大正3年という、レコードはすでに両面盤へ移行している時代に設立されたのなら、少なからず存在する片面盤のオリエントレコードはどこで製造されたのか。従来のレコード史の記述では説明されていない。

当該研究ではこれらの疑問点を解消し、創立から日蓄との合併に至る期間の歴史を明らかに出来た。そのポイントは以下の～

である。

#### 東洋蓄音器商会

日出新聞に掲載された(株)の第1回営業報告を見ると、その資産の部に東洋蓄音器商会買収金として60,000円が計上されていることから、当時すでに東洋蓄音器商会(以下・商会)という会社が存在したことが分かるが、その実体は日出の商業登記公告欄にも一切現れず(おそらく個人経営であったためと考えられる)長らく不明のままであった。

今回商会について明らかにできたのは、大阪朝日新聞京都附録掲載の「ここに始めあり」というコラムの第10回「京に発祥の円盤 差押へられた罌堂翁初の吹込み」(昭和15年1月14日p.7)を確認できたことによる。この記事によれば商会は明治40年に福永孝蔵が木屋町松原下ルに工場を設け、出張録音盤の複写盤製造を開始し、後に奥島(株)初代社長)村田(村田時計店社長)の後援を受け、猪熊五条角に商会を創設したとある。したがって商会設立は他の資料から明治41、2年と考えられるが、創業は明治40年として差し支えないだろう。同社はイカリ、サンライズ、メリー、オリエントといったレーベルで複写盤の製造販売を行っていた。前述の片面盤複写オリエントはこの時代のものが多いと考えられる。

福永孝蔵に関しては、山崎整によってすでに東洋蓄(株)(合)、日東蓄音器の録音技師を経て名古屋の大和蓄音器商会、アサヒ蓄音器商会に関わった後、昭和9年京都に福永レコードプロダクションを設立し、常に関西系レーベルの中心に身を置いたことが明らかにされている。そこに当該研究で得られた商会の創業者であるという経歴を加えることで、福永を関西系レーベルのみならず日本レコード史の黎明期における、レコード製造技術の源流に位置づけることが出来た。

#### 東洋蓄音器株式会社

(株)は正規盤メーカーとして位置づけされているが、会社設立の動機は複写盤ビジネスにあったと考えられる。当時の売れ筋商品は何と言っても桃中軒雲右衛門、吉田奈良丸、京山小円らの浪花節レコードだったが、(株)は設立時に日蓄との間に同社の商品のコピーはしないという契約を交わしていたため、(株)の経営陣は壬生の複写盤工場にこれらの浪花節レコードを複写させ、トンボ等の別レーベルで発売した((株)の経営陣は内外蓄音機商会という販売会社も経営していた)。この行為が日蓄との間の訴訟に発展し、結果示談に収まったものの、その賠償が(株)の経営を大きく圧迫したと考えられる。大正3年5月発売の松井須磨子「復活/復活唱歌」が大ヒットするものの経営回復は叶わず、設立4年目半ばの大正5年3月から社屋設備を後述の合資会社京都興業商会(以下・京興)に賃貸して製造を委託するようになり、ついに大

正6年7月29日をもって(株)は解散した。

#### 合資会社京都興業商会

大正3年12月30日設立の複写盤メーカー。所在地・葛野郡朱雀野村大字壬生小字壬生辻24番地。の浪花節の複写盤製造を請け負った壬生の小早川彦六経営の工場がその前身と考えられる。同社にはウグイス(複写盤)、からとり(複写盤)、八千代(正規盤)といったレーベルがある。

#### 東洋蓄音器合資会社

前記京興は壬生から(株)本社工場へ移転するに先立ち、大正5年2月25日付で社名を東洋蓄音器合資会社に変更する。その後(株)を吸収合併し、大正7年2月3日に正式に本社所在地を(株)のあった下京区五条通猪熊西入柿本町593番地に移した。

社名を変更したのは、馴染みあるオリエントのレーベルを引き継ぐにあたり、東洋蓄音器の商標を使うのが得策と考えたのだろう。同じ東洋蓄音器同士の買収劇の真相である。

(合)はその後、大正6年6月に大阪の複写盤メーカーの声光商会を買収し、さらに大正7年3月に正規盤・複写盤メーカーの大阪蓄音機株式会社と合併して、順調に経営を拡大していたように見えた。しかし大正8年11月30日に業界最大手の日蓄と合併し、翌12月1日より株式会社日本蓄音器商会京都分工場となった。オリエントレーベルは日蓄に継承されたが、東洋蓄音器の時代は終わった。

以上、「研究の目的(1)」は達成できたと考えるが、京都のレコード産業という、新しいビジネスに関わった数多くの出資者やその親族と思われる人物にまで踏み込むことは出来なかった。今後の課題としたい。

#### (2) ディスコグラフィ

当該研究の基礎資料としたのは次の8種の総目録である。

正規盤に関しては、

a「ORIENT RECORD」東洋蓄音器株式会社、大正2年カ、正規盤36頁、複写盤48頁掲載  
b「ラクダ印オリエントレコード両面盤総目録」東洋蓄音器合資会社、大正5年7月、53.6cm×72.ecm、片面印刷(国立国会図書館蔵)

c「ラクダ印オリエントレコード両面盤総目録」東洋蓄音器合資会社、大正7年カ、53.2cm×74cm、両面印刷

d「ラクダ印オリエントレコード両面盤目録」京都オリエント工場、大正9年8月、53cm×74cm

複写盤に関しては

a 前掲

e「ORIENT RECORD」東洋蓄音器株式会社、大正元年カ、複写盤のみ80頁掲載

f「ORIENT RECORDS」株式会社内外蓄音機商会、大正元年カ、複写盤のみ80頁掲

載

g「東洋蓄音器合資会社音譜目録(ウグイス、からとり、八千代掲載)」東洋蓄音器合資会社、大正5年カ

h「ウグ井スレコード両面盤目録」東洋蓄音器合資会社、大正5年7月、52.3cm×74cm、片面印刷(国立国会図書館蔵)

上記以外に新聞・雑誌広告等のレコード情報や、報告者所蔵のオリントレコード約400枚の情報を総合し、Excelの表形式にした。なお複写盤に関しては、掲載数の多いa、gをデータ化し表形式にした。

#### 「正規盤オリントレコードディスコグラフィ」

正規盤の片面盤2枚、両面盤853枚のディスコグラフィである。(株)の大正2年2月の第1回発売から、(合)最後の大正8年12月新譜までをほぼ網羅出来たと考える。オリントは当初片面盤で発売されたが、すぐに両面盤に切り替わった。前記aはすでに両面盤になってからの総目録につき片面の正規盤の情報は不明のままなので、報告者所蔵の片面盤のデータのみを掲載した。

オリントレコードのレコード番号の大小は、必ずしも発売順を示してはいない。特にaに掲載されている、ごく初期のレコードについては発売後廃盤になったものもあり、後から出た新譜に廃盤の番号を割り当てている場合も多く見受けられる。本ディスコグラフィではこのような場合、同じ番号の新旧を併記した。

#### 「複写オリントレコード総目録」

(株)の複写盤オリントレコードで、前記aの「赤マーク(複写盤)」掲載の両面盤307枚を掲載のディスコグラフィである。

#### 「東洋蓄音器合資会社音譜目録」

前記g掲載のウグイスレコード(複写)347枚、からとりレコード(複写)10枚、八千代レコード(正規盤)3枚のディスコグラフィである。

は(株)の複写盤のため前記4-(1)-の理由から日蓄オリジナルは少ないが、(合)は日蓄との契約などないため、遠慮なく日蓄の売れ筋をコピーしている。

以上 を作成したことにより、「研究の目的(2)」は達成できた。これらを今後の諸研究の基礎資料として提供できることは非常に意義深いと考える。ただ において発売年月が特定できていない部分があることは今後の課題として残る。できればWebで公開しつつ、今後判明したことについては追加情報として随時更新したい。

#### (3) SPレコード成分の科学的分析

SPレコードの材料はシェラックを中心に

数種の増量剤、充填剤、補強材、顔料等を加熱しながら練り合わせたものが使用される。その種類や配合は各社独自のもので、しかも目分量で作られていたようだ。したがって同じ会社の製品でも、ロットが違えば成分の比率が異なる可能性がある。

今回調査した36レーベル計100枚の分析結果からは合計36種類の元素、化合物が検出された。当該研究ではこの含有量の多いBa(バリウム)、Fe(鉄)、Ca(カルシウム)、K(カリウム)、Si(ケイ素)、Al(アルミニウム)の6種類の元素に注目し、各レコードにおけるこれらの含有量を次の図1~3のような棒グラフに表し比較検討した。

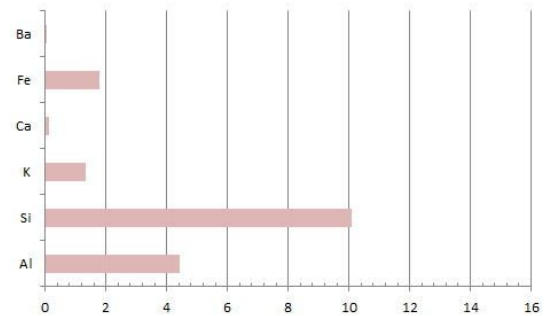


図1 オリント A758 (非 Ca 系)

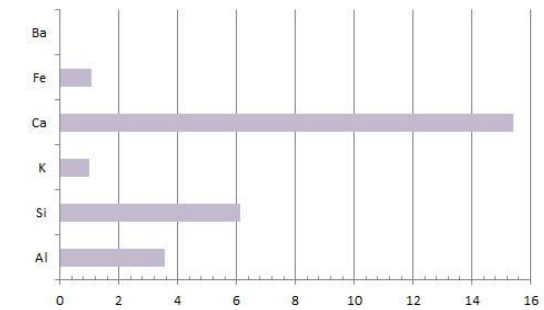


図2 オリント A2145 (Ca 系)

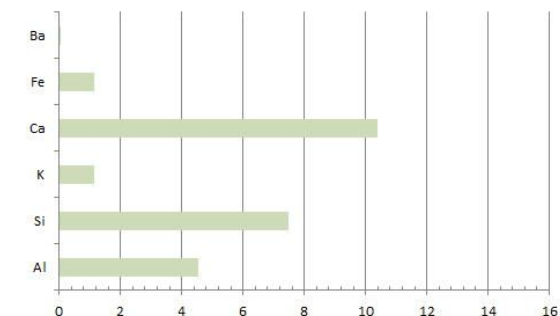


図3 オリント 1481 (Ca 系)

全100枚のグラフを見ると、図1のようにCaをほとんど含まないものと、図2、3のように多く含む物があることに気付く。おそらく増量剤に炭酸カルシウムを使うか使わないかの違いと思われるが、報告者はCaの含有率が2%未満のものを非Ca系、2%以上のものをCa系とし、二つのグループに各メーカーを分類したところ、次のような結果を得

た。

非 Ca 系 30 レーベル 68 枚

- \*東洋蓄音器商会・東洋蓄音器株式会社
- \*小早川工場・京都興業商会・東洋蓄音器合資会社
- \*日本蓄音器商会京都分工場
- \*声光商会
- \*複写盤 5 種（製造元不詳）
- \*大阪蓄音機
- \*日米蓄音機製造、日本蓄音器商会
- \*日東蓄音器
- \*大和蓄音器商会、アサヒ蓄音器商会
- \*時枝商店
- \*東亜蓄音器
- \*酒井公声堂
- \*三光堂

Ca 系 11 レーベル 32 枚

- \*東洋蓄音器合資会社
- \*日本蓄音器商会京都分工場
- \*帝国蓄音器商会
- \*大阪蓄音機
- \*東京蓄音器
- \*米国ビクター
- \*内外蓄音器商会
- \*三光堂

の非 Ca 系には 4 - (1) - で触れた福永孝蔵が関わった 印の会社が揃って含まれているが、ある意味首尾一貫した結果といえる。

図 1 と図 2、3 はどちらも(合)製造のオリエントレコードだが、Ca の含有率は正反対である。時期によってレコード会社が材料や配合を変える可能性はある。それは大阪蓄音機のレコードが非 Ca 系と Ca 系の両方にあることから想像できる。ただ 4 - (1) - の(合)の歴史を考えると別の見方が出来る。

(合)は大正 7 年 3 月に大阪蓄音機株式会社と合併し、大阪蓄は(合)の大阪蓄音器製造所（以下・製造所）となった。図 2 のレコードは元々大阪蓄ナショナルレコードだったものが、(合)と合併後にオリエントレーベルで発売された。したがって原盤を保存する元大阪蓄の工場の製造所で作られたとしても不思議ではない。また図 3 のオリエント盤だが、これは大正 8 年 1 月新譜で大阪蓄との合併後のレコードである。したがって生産ラインの都合で、オリエントレーベルを製造所を使ってプレスしたとは考えられないだろうか。

Ca 系に分類された帝国蓄音器（以下・帝蓄）の創業者松村忠三郎は、京都で商会時代の複写盤メリーレコードを販売する清声社を経営していたが、後に上京し帝国蓄音器を設立した。同時にメリーレコードを商標登録し帝蓄から発売している。この件から帝蓄は当然福永系統の非 Ca 系と思われたが、意外

にも分析結果は Ca 系だった。

これとは逆のケースが Ca 系の内外蓄音器商会（以下・内外）である。内外は大正 13 年 8 月に兵庫県西宮市に設立された純関西系の会社で、関西系が多い非 Ca 系と考えたが、予想に反して Ca 系だった。実は内外は創業に際し、当時神戸市長田区にあった帝蓄神戸工場の録音・製造設備一切を買い取り、自社工場を立ち上げたという。おそらく製造ノウハウも帝蓄の指導を受けたのではないだろうか。分析結果がそれを裏付ける例である。

分析結果に関する考察はこれら以外にもあるが、紙幅の都合で省略したい。

SP レコードの成分を分析し、その傾向からレコード製造の技術的系譜をたどるということは、報告者にとってこれが初めての経験で、過去にも例を見ないと思われる。

分析データのみからレコード史の事実を引き出すことは難しいが、レコード史の裏付けにこれらのデータは非常に価値のある情報であることを今回確信した。ただこれらの分析結果を使いこなすためには、レコード史に精通する必要があることを痛感したのも正直なところである。

蛍光 X 線分析法という手法は比較的大きな試験片（今回は直径 30mm の丸形に加工した）が必要なため、前述のとおりレコード盤を潰さなければならないという大きなリスクは伴うが、それさえクリアできれば確実に分析データが得られる点は非常に有難かった。

今回は 36 レーベル計 100 枚の試験片を用意したが、これではやはり少なかったというのが実感である。せめて 1 レーベルあたり 50 枚程度は分析し（製造期間の長いニッポノホンなどは 100 枚ぐらい）、その会社の傾向を把握した上で他社との比較を行うべきだろう。問題になるのは試料とするレコード盤の確保と経費だが、レコード史の基礎データを充実させるためには意義のあることと考える。

以上当該研究の目的はほぼ達成できたと思われる。研究結果は所属先の京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの出版物「日本伝統音楽資料集成」や同センター HP での公開を考えている。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

大西秀紀、豊竹山城少掾ディスコグラフィ、豊竹山城少掾展・展示図録、早稲田大学演劇博物館、2013、24 - 34

大西秀紀、新国劇関連 SP レコードディスコグラフィ、企画展 寄らば切るぞ！新国劇と剣劇の世界・展示図録、早稲田大学演劇博

物館、2014、21 - 23

〔学会発表〕（計 4 件）

大西秀紀、戦前の都をどり、藝能史研究會  
第 50 回大会、同志社女子大学、2013

大西秀紀、未確認の音声資料発掘の可能性、歌舞伎学会秋季大会、東京文化財研究所、  
2013

大西秀紀、SP レコードに聴く邦楽の近代化、研究プロジェクト「東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」 「伝統の相対化と「文化」の動態把握の試み」、国際高等研究所、  
2015

大西秀紀、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所蔵の音声資料とアーカイブについて、国際シンポジウム「私たちは何を録音してきたのか～古音源の保存と活用～」  
2014 年度神戸大学国際文化学研究推進センター研究プロジェクト「日本研究の文化資源学」第 5 回研究会、神戸大学国際文化学研究科、2015

〔図書〕（計 1 件）

大西秀紀、オリエントの謡曲レコード、高橋・丹羽・藤田編・謡を楽しむ文化 京観世をめぐって、京都市立芸術大学、2016、ページ未定

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター

<http://w3.kcua.ac.jp/jtm/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大西 秀紀 (ONISHI, Hidenori)

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：60469111

### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：